

## 松本盆地北部における

### 戦後開拓農地の地理学的考察

星 野 美 津 子

調査地域は、松本盆地北部、信濃大町市を中心とする地域で、東縁を犀川丘陵に、西縁を3000mを越える急峻な飛驒山地によって境され、高瀬川とその支流によって形成された合流扇状地である。本論文ではこの地域に小団地で散在する戦後開拓農地についての考察に重点をおき、第二章 自然環境、第三章 農業の概説は全体的な地域性を把握するためにもうけた。第二章 自然環境における、地形は形態による区分に地形面の生成時代を考察して扇状地Ⅰ面、Ⅱ面、沖積面、段丘面、すそ谷、沖積錐と地形区分を行い、地形発達に関する考察を若干試みた。ところで当地域における農業は、冬期に積雪のあることから水田単作となっており、桑園、畑地の水田への転換さらには早生耐冷性品種や、ビニール苗代の導入等の水稻栽培技術の向上により増々水稻中心の農業へ移行している。そして昭和電工、呉羽紡績の地元工業と黒部ダム完成による観光業の発展という影響をうけて、専業農家は激減しているが、第一種、第二種兼業農家の労働力はこの地域に吸収され、出稼がほとんどみられないのが特徴である。第四章ではこの様な地域に戦後入植した開拓農地の発展過程と概説を主として統計を使用して考察し、第五章では地形面の差から大峯、松川、神戸原、東松川、常盤、上原の6つの開拓地を選択して開拓地相互の比較を第六章要約で水田開拓の指向性についての考察を行った。その結果水田開拓のほぼ定着した昭和30年を境としてそれ以前とそれ以後の段階にそして農業経営の停滞あるいは後退を示す昭和40年以後の段階の3つに発展過程は分けられ、現在では既存農家と開拓農家との間の差は顕著でなくなってきており、むしろ既存農家の平均より、収入、経営規模、経営内容等すべての面ですぐれている。又6開拓地においては、開拓の度合は、①丘陵上の大峯開拓地のみが畑作経営で開拓の度合が最もおけている、②東松川、神戸原、松川、常盤は安定、③上原は両者の中間型にあたる事が判明した。②のグループの中では東松川が最も水稻栽培が卓越し、神戸原は家畜を導入した多角的な経営が、松川、常盤では常盤の方が安定の度合いが大きい。これらの開拓地間における開拓の度合の差は地形、気候の自然条件、水利、開拓過程の差等様々の条件によりもたらされたものである。当開拓地の最大の特徴である水田開拓の指向性については、最大の要因として、用水を確保することが出来たということと、用水路建設、客土施行に対して国や県からの巨額の資金援助があったということがあげられる。

以上のような性格を持つ開拓地は既存農家並に達した現在、労働力不足あるいは後継者問題とい

う既存農家と同様のなやみを持ち始めている。

## 岩手県久慈市の地理学的考察

山崎民子

本論文では、一地域を地誌的にとりあげ、そこからその地域の性格をつかむことを目的とした。

論文の構成内容は、以下の通りである。

### 久慈市の農業地域区分図

